

〔研究報告〕

作業療法士・言語聴覚士を目指す学生と臨床実習指導経験者の コミュニケーション・スキルの違いについて

千葉さおり¹⁾、佐藤 彰博¹⁾、浅田 一彦²⁾

要 旨

臨床実習においてコミュニケーション能力の低下などによって、指導者から不適格とされる学生が増えている。そこで、作業療法士・言語聴覚士を目指す学生と実習指導経験者のコミュニケーション・スキルの違いを明らかにすることを目的とした。本学医療技術学科1・2年生（学生群）と指導者（指導者群）を対象に、コミュニケーション・スキル尺度ENDCOREs（藤本・太坊、2007）を用いてコミュニケーション・スキルを測定した。得られたデータを全項目得点平均値、下位尺度毎の平均値、サブスキル毎の平均値の差について2群間での比較を行った。さらにクラスタ分析によって得点パターンの分類を行い、学生・指導者と各クラスタの関係を χ^2 独立性の検定によって分析した。その結果、下位尺度毎の比較では他者受容のみが学生群において有意に高かった。また、得点パターンは3つのクラスタに分類されたが、学生・指導者と各クラスタの間に統計学的な差はなかったことから、両群のコミュニケーションの対象の違いが影響している可能性が考えられた。

限定的な学生の対人関係において、自己のスキルについて振り返りや気づきがされにくいと考えられるため、自己のコミュニケーションについて振り返る機会を設けたり、社会と関わる機会を作ったりすることが必要であると考えられた。

キーワード：臨床実習、コミュニケーション・スキル、自己評価

I. はじめに

作業療法士・言語聴覚士など、対人サービスを行う専門職における臨床技能の基本となるのは接遇とコミュニケーション、医療面接であるとされている¹⁾。医療はサービス業であり、患者とセラピストの間に信頼関係を構築できなければ治療を実施することは困難となる。大瀧ら²⁾は、作業療法を実践するためには、良好なコミュニケーション能力を身につけ、関係性を構築することが根底にあり、作業療法士である前に人として必須の技能であると述べている。また、日本作業療法士協会は、作業療法士として必要な資質・適性には理解力や問題解決力などの認知領域、検査や測定・観察を行う精神運動領域、態度や社会人としてのマナー意欲などの情意領域の教育を重要としている³⁾。さらに、作業療法士が活躍する場が医療・福祉・介護と拡大していることやチーム医

療として連携をとることが重要とされており、コミュニケーションは必要不可欠である。

作業療法士や言語聴覚士を目指す学生にとって臨床実習は必須の科目であり、これまでの学内教育で身につけた知識や技術を実践する場である。しかし、臨床場面では社会人としての立ち振る舞いや専門職としての技能、患者や家族、医療スタッフとのコミュニケーション能力を求められ、学生生活とは大きく異なった環境に身を置くこととなる。そのため、臨床実習が学生にとってストレスフル・イベントとなっているとされている⁴⁾。

近年、全国の理学療法士・作業療法士会養成校におけるコミュニケーション能力や社会性の低さによる臨床実習不適応が問題視され、臨床実習において不適格とされる学生が増えている⁴⁻⁵⁾。臨床実習で不合格となる要因としては、「専門職としての資質」や「コミュニケーション不足」の割合が高いことが報告⁶⁻⁷⁾され、挨拶や態度

1) 弘前医療福祉大学保健学部医療技術学科 作業療法学専攻 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1)

2) 弘前医療福祉大学保健学部医療技術学科 言語聴覚学専攻 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1)

などの情意領域の問題が指摘されている⁸⁾。また、不合格となる一部の学生は、実習指導者とのコミュニケーション不足や関係性の構築がうまくできず、ますますコミュニケーションが図れなくなるという悪循環に陥り、実習継続が困難になると言われている。先行研究⁹⁻¹¹⁾においても、臨床実習に対して学生は対人交流に自信がなく、実習指導者や患者と上手く関われるかということに不安を感じていると報告されている。さらに三宅ら¹²⁾は、実習指導者が実習成績を判定する際に、知識・技術面よりも実習に臨む姿勢などの態度面に関する項目を重視しているとしている。そのため、実習を行う上でコミュニケーションをうまく図れるかが重要なポイントと考えられる。

本学の作業療法学専攻ならびに言語聴覚学専攻の臨床実習においても、「学生が患者や実習指導者と円滑なコミュニケーションが図れず、思うように実習が進まない」との指摘を実習指導者より受けることが少なくない。そのため、学生のコミュニケーション・スキルがどの程度身につけているのかを把握し、臨床実習に向けて不足しているコミュニケーション・スキルを具体化して身につけられるような取り組みをしていく必要がある。そこで、本研究では学生と臨床実習指導経験者のコミュニケーション・スキルの違いを明らかにすることと、学生のコミュニケーション・スキルの特徴を捉えることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象

臨床実習を経験していない本学医療技術学科作業療法学専攻、言語聴覚学専攻の1・2年生140名全員を対象として学生群とした。また、平成24～平成23年の間に本学医療技術学科の評価実習および総合臨床実習を担当した臨床実習指導者を対象として指導者群とした。対象者数はサンプルサイズ計算（検出力0.8、 α エラー0.05、effect size 0.5）により各群64名と設定した。学生群の回収率を60%程度、指導者群の回収率を30%程度と推定し、学生140名、指導者200名に調査を実施することとした。なお、回収数がsample sizeを大幅に上回った場合には、無作為抽出を行うものとした。

また、今回の対象を医療技術学科の学生とした理由は、看護学科の実習形態が医療技術学科と異なることから、求められるコミュニケーション・スキルに違いがある可能性が考えられたためである。作業療法学専攻と言語聴覚学専攻の臨床実習は1対1であるのに対し、看護学科では対象者が複数である。加えて看護学科の実習では1施設に複数の学生が配置されグループで実習を行う

ことや実習期間が異なること、本学の教員が指導官として付き添う形態であることが挙げられる。そのため、ほぼ同様の実習形態である作業療法学専攻および言語聴覚学専攻の学生を対象とした。さらに今回は、学生のコミュニケーション・スキルの特徴を捉えることも目的としているため、実習を経験していない学生に限定した。

2. 調査項目

コミュニケーション・スキルは、コミュニケーション・スキル尺度ENDCORES¹³⁾を用いて測定した。ENDCORESは、言語および非言語による直接的なコミュニケーションを適切に行う技能であるコミュニケーション・スキルを測定する尺度であり、「自己統制」「表現力」「解読力」「自己主張」「他者受容」「関係調整」の6つの下位尺度から構成される。各下位尺度はそれぞれ4項目のサブスキルにより構成され、全24項目に対し自己評価により7件法で回答する。また、ENDCORESは「自己統制」「解読力」「表現力」の3項目を基本スキル、「自己主張」「他者受容」「関係調整」の3項目を対人スキルと定義しており、基本スキルよりも対人スキルは高次なスキルとして位置づけられている¹⁴⁾。また、「解読力」・「他者受容」は反応系スキルに、「表現力」・「自己主張」は表出系スキル、「自己統制」・「関係調整」は管理系スキルとして分類されている¹³⁾。そして、点数が高いほど、その尺度に対する自己評価が高いことを示している。

対象者属性については、学生群に対し年齢、性別、専攻、学年を調査した。指導者群に対し、年齢と性別、職種、経験年数、勤務している分野、勤務している施設について調査した。

3. 調査方法

データの収集方法は、学生群に対しては、研究の趣旨を示した文書と同意書、研究への協力を受諾する際の権利について示した文書、ENDCORES評価用紙を各専攻の各学年にそれぞれ一斉に配布し、研究代表者が口頭で説明を行った。研究協力で賛同が得られる学生のみ各自同意書への署名と質問紙へ回答してもらい、専攻毎に設けた一定の回収場所に提出してもらった。配布から回収までの期間は約1週間とした。

指導者群に対しては、研究の趣旨についての説明文書、研究協力への依頼文、ENDCORES評価用紙、研究への協力を受諾する際の権利を示した文書、同意書、返信用封筒を同封し、各実習指導者宛に郵送した。研究への協力が得られる場合にのみ、同意書へ署名をしてもらい、回答した評価用紙と一緒に返信用封筒にて回収した。発送から回収までの期間は約1か月とした。

なお、除外基準はコミュニケーション・スキル尺度の

回答に1項目でも欠損があった場合とした。

4. 調査期間

平成25年11月から平成26年1月にかけて各群のデータ収集を行った。

5. 分析方法

統計学的検討は、ENDCOREsの全項目得点、各群の6つの下位尺度毎、6つの下位尺度を構成するサブスキルについてMann-Whitney検定を行った。さらに、表出系スキル、反応系スキル、管理系スキルについて2群間の比較を同様に行った。そして、各群の得点パターンをクラスタ分析にて分類し、 χ^2 独立性の検定を用いて学生群と指導者群の割合について検討した。また、学生群と指導者群毎に表出系スキル・反応系スキル・管理系スキルの比較を反復測定による一元配置分散分析と多重比較にて行った。統計学的分析には、IBM SPSS Statistics Ver.22を使用し、有意水準は5%とした。

Ⅲ. 倫理的配慮

研究への協力が得られる場合のみ評価用紙を提出または返送してもらうこととし、任意性を確保した。そして、対象者に研究への協力を受諾する際の権利を示し、同意書を同封してインフォームド・コンセントが得られるように配慮した。その際、学生群に対しては、研究への協力が得られない場合でも成績へ影響しないことを説明した。また、個人情報の保護、得られたデータの管理

方法、処理についての説明文書を学生群へは口頭で説明し、指導者群には評価用紙と共に同封した。なお、本研究は、弘前医療福祉大学研究倫理規定に沿って行われ、本学の研究倫理審査を受け、承認を得た後に行った。

Ⅳ. 結果

1. 対象者属性

学生群140名のうち、回収数は111名で回収率は79%であった。指導者群は200名のうち86名から回答が得られ、回収率は43%であった。除外基準に該当しない有効回答数は学生群110名（男性：51名、女子：59名）、指導者群84名（男性：47名、女性：37名）であった。学生群の平均年齢は19.8±3.2歳で、1年生53名、2年生57名、専攻の内訳は作業療法学専攻学生88名、言語聴覚学専攻学生22名であった。指導者群では、平均年齢36.5±8.9歳で、経験年数は平均11.6±6.7年であった。勤務している分野は、病院62名、老人保健施設17名、児童福祉施設3名、無回答2名であり、勤務分野は、身障分野35名、精神分野20名、老年分野23名、発達分野4名であった（表1）。

2. 学生群と指導者群の比較

全項目得点平均は、学生群4.58±0.71、指導者群4.52±0.74で、有意確立は $P=0.336$ で2群間に差はみられなかった（表2）。6つの下位尺度毎の比較では他者受容のみが $P=0.021$ で有意であり、学生群の方が高かった。サブスキルにおいては、他者受容の友好性が $P=$

表1 対象者属性

	年齢(平均±SD)	性別	専攻	学年			
学生群 (N=110)	19.8±3.2歳	男性	50名	1年 52名			
		女性	60名	2年 58名			
	年齢(平均±SD)	性別	職種	経験年数	勤務分野	勤務施設	
指導者群 (N=84)	36.5±8.9歳	男性	47名	作業療法士 58名	11.6±6.7年	病院 62	身障 35
		女性	37名	言語聴覚士 26名		老健 17	精神 20
						児童福祉施設 3	老年 23
						不明 2	発達 4

SD:標準偏差

表2 学生群と指導者群のENDCOREs下位尺度の比較

下位尺度	自己統制	表現力	読解力	自己主張	他者受容	関係調整	基本スキル	対人スキル	全項目得点
学生群	平均	4.71	3.94	4.89	3.81	5.36	4.81	4.51	4.58
	中央値	4.75	4.00	5.00	3.88	5.25	4.88	4.46	4.61
指導者群	平均	4.63	4.07	4.72	4.01	5.06	4.63	4.47	4.52
	中央値	4.50	4.00	4.75	4.00	5.00	4.50	4.38	4.42
Mann-Whitney	有意確立(P)	0.387	0.412	0.146	0.305	0.021*	0.105	0.473	0.336

*: $P<0.05$

0.043、譲歩が $P = 0.007$ 、他者尊重が $P = 0.047$ で3項目とも学生群が指導者群に比べ高かった。さらに、関係調整のサブスキルである関係重視が $P = 0.004$ 、関係維持が $P = 0.043$ で有意となり、これも学生群で高かった(表3)。また、表出系スキル、反応系スキル、管理系スキルの2群間の差については、表出系スキルが $P = 0.336$ 、反応系スキルが $P = 0.002$ 、管理系スキルが $P = 0.524$ であり、反応系スキルが学生群で有意に高かった(表4)。

得点パターンは、3つのクラスタに分類され(図1)、各クラスタにおける学生群と指導者群の関係性について 2×3 分割表(表5)を用いて χ^2 独立性の検定を行った。分割表における各クラスタの人数の割合は、クラスタ1では学生群46.3%、指導者群34.5%であり、クラスタ2では学生群18.1%、指導者群16.6%、クラスタ3では学生群35.4%、指導者群48.8%であった。 χ^2 独立性の検定の結果、有意確率 $P = 0.154$ となり、学生・指導者と各

表3 学生群と指導者群のENDCOREs 下位尺度の比較

サブスキル	自己統制				表現力				解読力				
	欲求抑制	感情統制	道徳観念	期待応諾	言語表現	身体表現	表情表現	情緒伝達	言語理解	身体理解	表情理解	情緒感受	
学生群	平均	4.72	4.70	5.11	4.33	3.53	4.11	4.33	3.79	4.71	4.88	4.99	4.98
	中央値	5.00	5.00	5.00	4.00	3.00	4.00	5.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00
指導者群	平均	4.52	4.39	4.96	4.64	3.87	4.13	4.30	3.99	4.57	4.76	4.76	4.77
	中央値	4.00	4.00	5.00	5.00	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00
Mann-Whitney	有意確立(P)	0.201	0.054	0.299	0.103	0.067	0.888	0.663	0.386	0.275	0.296	0.101	0.207

自己主張				他者受容				関係調整			
支配性	独立性	柔軟性	論理性	共感性	友好性	譲歩	他者尊重	関係重視	関係維持	意見対立 対処	感情対立 対処
3.63	3.89	4.13	3.58	5.34	5.41	5.34	5.36	5.30	5.44	4.42	4.08
4.00	4.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	6.00	4.00	4.00
3.95	3.85	4.33	3.89	5.06	5.13	4.96	5.08	4.99	4.98	4.32	4.21
4.00	4.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	4.00	4.00
0.054	0.739	0.289	0.165	0.088	0.043*	0.007*	0.047*	0.004*	0.043*	0.478	0.606

※: $P < 0.05$

表4 表出系スキル、反応系スキル、管理系スキルの比較

	表出系 スキル	反応系 スキル	管理系 スキル	
学生群	平均	7.75	10.25	9.20
	中央値	7.8	10.3	9.8
指導者群	平均	7.70	9.60	9.42
	中央値	8.0	10.0	9.0
Mann-Whitney	有意確立(P)	0.336	0.002	0.524

※: $P < 0.05$

表5 各クラスタの分割表

	クラスタ1	クラスタ2	クラスタ3	合計
学生群	51	20	39	110
指導者群	29	14	41	84
合計	80	34	80	194

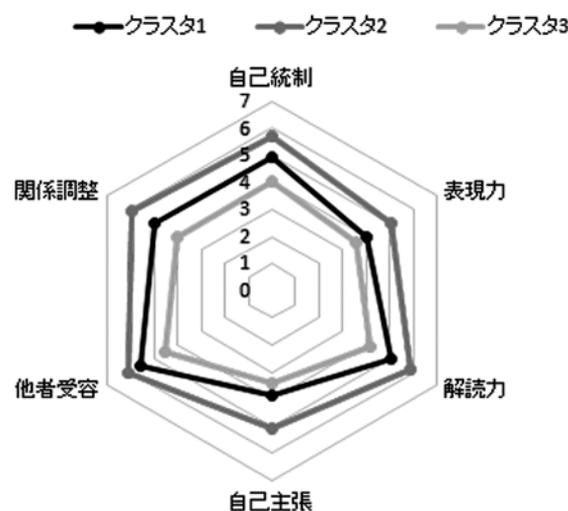


図1 クラスタ別下位尺度の平均

クラスタの関係に有意な差は認められなかった。

表出系スキル・反応系スキル・管理系スキルについて、学生群と指導者群毎に比較した結果、両群とも Mauchly の球面性検定は有意であり、球面性の仮定は成り立たなかった。したがって Greenhouse-Geisser の検定の結果、3つのスキルの平均スコアは有意な差を認めた。そして、反復測定分散分析後に多重比較(ボンフェローニ法)を行った。その結果、学生群内では、3つのスキルにそれぞれ有意な差を認め、反応系スキルが表出系スキルと比べて得点が高く、表出系スキルは反応系スキル・管理系スキルと比較し有意に得点が低かった。指導者群においては、表出系スキルと反応系・管理系スキルの間には差を認めたが、反応系と管理系の間には有意な差を認めなかった(図2)。

V. 考 察

コミュニケーション・スキルは、社会スキルに含まれる基礎的な能力であり、コミュニケーションの記号化と解釈、他者との関係性についての認知を基盤とし、相手との対人関係の中で柔軟に発揮される¹⁵⁾。また、社会スキルは年齢とともに尺度得点が高くなるとされている¹⁴⁾。そのため今回の研究では、社会経験の少ない学生群より指導者群の得点が高くなるとの仮説を立てて実施した。しかし、学生群と指導者群のコミュニケーション・スキルを比較した結果、両群の間に違いを認めたのは6つの下位尺度のうち他者受容の尺度のみであった。サブスキルについては、他者受容の「友好性」、「譲歩」、「他者尊重」と関係調整の「関係維持」、「関係重視」の5項目につい

て差を認めた。これらについても、仮説に反して学生群で得点が高いという結果であった。この理由として考えられることは、学生群と指導者群ではコミュニケーションを行っている対象者が異なることが挙げられる。学生のコミュニケーション主な対象者は、日常的に出会う友人や家族、教員、アルバイト先のスタッフなど限られた人間関係の中にあると考えられる。また、大学生は、マニュアル的な対応や親しい友人など安定した関係でのコミュニケーションを得意とし、初対面やある程度関係が続くことが予想される相手とのコミュニケーションが苦手であるとされている¹⁶⁾。このような環境の中で、日常的に関わりのある親しい相手の反応から、自分のコミュニケーション・スキルを評価し、認識していることが予想される。

一方で指導者は、同じ部署の同僚や上司、医師・看護師などの他部署の医療スタッフ、身体あるいは精神に何らかの障がいを抱えた患者やその家族など、コミュニケーションの対象は幅広い。また、作業療法士や言語聴覚士の職業特性として、相手が今何を望んでいるのか、どのような状態なのかを常に評価し、把握することが必要である。そのためには、表情の読み取りや声かけなど言語的・非言語的なコミュニケーション・スキルが求められる。また、患者・家族への説明や他職種連携のために、簡潔に説明するスキルも必要とされる。吉井¹⁷⁾は、理学療法士に行ったコミュニケーションに対する意識調査で、全体の75%がコミュニケーション能力を高めるために日々努力していると回答したと報告している。したがって、指導者群は専門職としての関わりの中で、立場の異なる相手とのコミュニケーションの難しさを理解

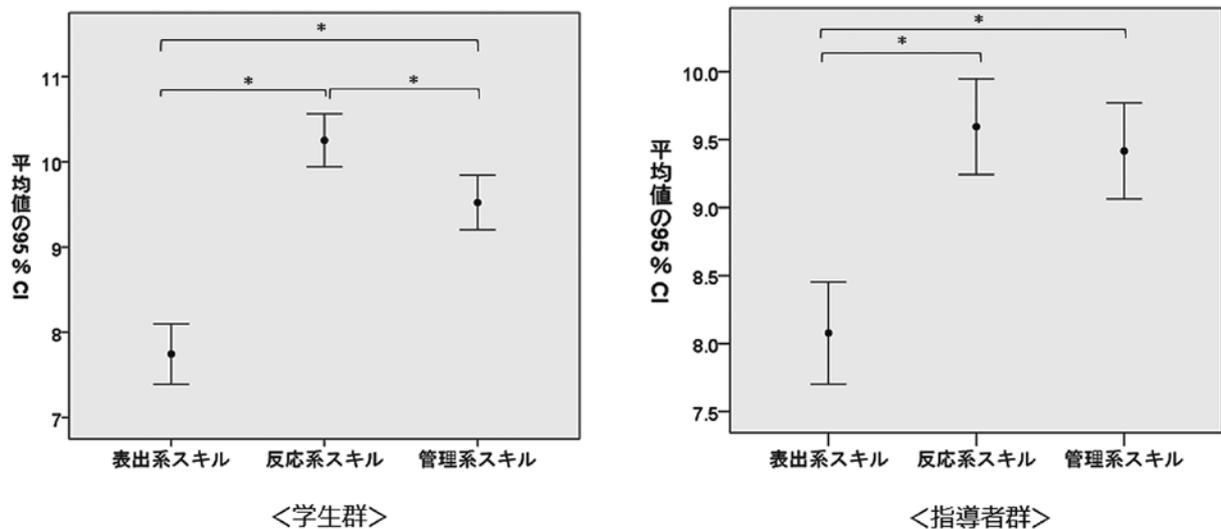


図2 学生群・指導者群の3つのスキルの比較

していると考えられる。そのため、仮説に反して学生群よりもコミュニケーション・スキルの自己評価が低く現れたのではないかと考える。

次に、本研究のもう一つの目的である学生のコミュニケーションの特徴については、指導者群と比較すると、他者を主体とした反応系スキルの得点が有意に高かった。また、学生群内における3つのスキルの比較でも、反応系スキルが自己の内面を伝達する表出系スキルや管理系スキルよりも高く、表出系スキルは反応系スキル・管理系スキルよりも有意に低かった。倉元らは¹⁴⁾、大学生のコミュニケーション・スキルの特徴について、表出系のスキルより反応系のスキルに対しての自己評価が高い傾向にあり、21歳以下では表出系のスキルに対して自信がないため、相手へ求める要求評価が高いと報告している。本研究でも同様の結果であった。しかし、指導者群においても表出系スキルは反応系・管理系スキルと比較して有意に低かったことから、表出についての苦手意識は学生に限ったものではないと考えられる。その一方で、指導者群では反応系と管理系には差を認めなかったが、学生群では差を認めたことから学生群のコミュニケーション・スキルは、反応系スキルを得意としていることが推察される。また、有意であったサブスキルはどれも相手との関係を重視した項目であったことから、学生は自分の意見を述べたりすることはあまり得意ではなく、他者を主体的としたコミュニケーションを図っているという特徴があると考えられる。1・2年生のほとんどが19~20歳という年齢であり、社会経験も乏しい。また、学内では主に知識を身に付ける時期にあり、授業に対して受動的になりやすく、実習や演習と異なり個々に対して表出系スキルが求められる機会は少ない。このような1・2年生という学年の背景が結果に関係している可能性もある。

学生の情意領域に対する自己評価について安田¹⁸⁾は、実際の患者や家族との対応、指導者の指導によって実習後に低下すると述べている。また、大坊¹⁹⁾は、自分のコミュニケーションに対する相手の反応を受けて、自分の特性を理解することができるかと述べている。臨床実習では学内と大きく異なった環境の中で、様々な立場の人とコミュニケーションを図らなければならない。そのような状況下において、学生は求められるスキルや指導者からのフィードバックにより、自身のコミュニケーション・スキルについて改めて認識することになると考える。一方、畠山²⁰⁾は、「青年期にある学生は、自分自身の行動や思考を手掛かりに自己を捉える傾向があり、学習状況を客観的に評価することが困難である」と述べている。また、神田²¹⁾らは、学生の自己評価と指導者の他者評価との間に認識の不一致が生じており、自己評価が高く

なる傾向があると報告している。このように、自己のコミュニケーションに対して評価が適切に行われなかった場合には、「言葉使いが不適切」、「自分の意見を相手に伝えられない」、「自己認識が適切に出来ない」などと報告²²⁾されているような問題へと繋がり、指導者との関係性の構築を難しくする原因となっていることが推測される。このような状況を防ぐためにも、自分のスキルを適切に評価できることが重要であると考えられる。今回の評価は自己評価のみであったため、今後は他者評価も含めて学生のコミュニケーション・スキルを評価し、捉えることが必要と考える。

本研究の結果より、作業療法士や言語聴覚士を目指す学生にとって、①学生が自己のコミュニケーションの特徴とスキルを適切に認識すること、②年齢や立場の違う人たちに対して積極的にコミュニケーションを図れるスキルを獲得することが非常に重要であると考えられた。そのための取り組みとしては、実習が行われていない1・2年次においても、サークルやアルバイト、地域でのボランティア活動などを通じて積極的に社会へ関わる機会を持つようにすることと、学内教育においては実際の治療場面を想定した演習課題やグループワーク、夏休みなどを利用した施設見学などを積極的に行っていくことが望ましいと考える。見学実習は、実際の臨床場面に触れることができ、学生の意欲や専門職という認識を高めるために有効とされている^{8, 23)}。また、森谷²⁴⁾は、学内での模擬患者による演習は、自己のコミュニケーションに対する課題に気づくことができ、実習のイメージトレーニングに有効であるとしている。このような機会を通じて、自己のコミュニケーション・スキルについての振り返る機会を多く設けていく必要があると考える。さらに、臨床で求められる能力について学生の理解を促すことや具体的にどのようなことに気を付けてコミュニケーションを図るべきか日頃から指導・支援していくことも必要と考える。

VI. 本研究の限界と今後の課題

今回、コミュニケーションを図る相手が学生群と指導者群で異なることが結果に影響していると考えられた。そのため、今後は、学生群のコミュニケーション・スキルの経時的な変化をみていくために、臨床実習経験後、作業療法士・言語聴覚士としての臨床初期、臨床実習指導者となった時期毎に同様の調査を行っていく必要がある。

Ⅶ. 結 論

1. 実習を経験していない学生と指導者のコミュニケーション・スキルの違いについては、他者受容の項目以外に差を認めず、学生群の方が指導者群よりも得点が高かった。その理由として、両者のコミュニケーションを行う対象の違いが影響している可能性が考えられた。
2. 学生の限定的な人間関係や1・2年生という基礎知識を身に付ける時期では、自己のスキルについて振り返りや気づきがされにくいと考えられる。また、学生のコミュニケーションの特徴として、表出は苦手而他者を主体としたコミュニケーションであることが示された。
3. 学内教育においては、他者からのフィードバックにより自身のコミュニケーションの課題について気付ける機会を設けることや、社会と関わる機会を設けることが必要であると考えられる。

謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力してくださいました本学医療技術学科の1・2年生の皆様、ならびに日頃から本学医療技術学科の臨床実習を受けて頂いている各病院・施設の実習指導者の皆様に深く感謝いたします。なお、本研究は弘前医療福祉大学平成25年度学長指定研究助成を受けて実施した。

(受理日 平成27年2月9日)

引用文献

- 1) 齊藤秀之、飯島弥生：学生・新人指導医関連する接遇・コミュニケーション・スキル. 理学療法ジャーナル 45(7)：597-603、2011
- 2) 大瀧 誠、梶田博之、中前智通、他：作業法学専攻学生が卒業時点で獲得している能力. 神戸学院総合リハビリテーション研究 2(1)：49-58、2007
- 3) 日本作業療法士協会 臨床実習の手引き～第4版～
- 4) 川崎京子、星山伸夫、中条晶子、他：臨床実習生の心理状態の検討-その1-. リハビリテーション教育研究 第2号：61-62、1997
- 5) 渥美恵美、大瀧憲一、稲垣成昭、他：作業療法臨床実習のための社会的交流技能事前教育プログラムに関する研究：学生の持つ交流技能の分析. 東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科紀要 3(1)：3-1、2007
- 6) 堀 秀昭、福谷 保、齋藤 等、他：学外実習における不合格原因の検討. リハビリテーション教育研究 第13号：76-79、2006
- 7) 勅使河原麻衣、渥美恵美、稲垣成昭：臨床実習における作業療法学生の対人葛藤、指導者との葛藤場面の分類. リハビリテーション教育研究 第13号：83-87、2008
- 8) 河元岩男：情意領域の早期教育. リハビリテーション教育研究 第3号：57-59、1998
- 9) 中野良哉、山崎裕司、酒井寿美、他：理学療法科学学生の実習終了後のストレス反応-実習における対人ストレスイベントとレジリエンスに注目して. 理学療法科学 26(3)：429-433、2011
- 10) 西本哲也、小原謙一、土屋景子、他：リハビリテーション学科学生におけるストレスコーピングの現状-1年次生と3年次生の比較-. リハビリテーション教育研究 第13号：64-66、2008
- 11) 星山伸夫、山崎京子、中条晶子、他：臨床実習生の心理状態-その2-. リハビリテーション教育研究 第2号：63-64、1997
- 12) 三宅わか子、村上忠洋、柘植英明、他：臨床実習における「職業上の適応性」が実習成績に及ぼす影響. リハビリテーション教育研究 第11号：46-48、2006
- 13) 藤本 学、大坊郁夫：コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究 第15巻 第3号：347-361、2007
- 14) 倉元俊輝、大坊郁夫：大学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する研究- ENDCORESを用いた検討-. 対人社会心理学研究 12：149-156、2012
- 15) 大坊郁夫：円滑な関係を築く社会心理学-社会的スキルを磨く-. 交流分析研究 第27巻 第2号：83-91、2006
- 16) 後藤 学、大坊郁夫：大学生はどんな対人場面を苦手とし、得意とするのか？コミュニケーション場面に関する自由記述と社会的スキルとの関連. 対人社会心理学研究 第3号：57-63、2003
- 17) 吉井智晴：理学療法士のコミュニケーションについての意識調査. 理学療法 進歩と展望 第18号：6-12、2004
- 18) 安田大典、樽井一郎、崎田正博、他：総合臨床実習における情意領域に関する学生の意識変容. 日本作業療法研究学会雑誌 14(1)：7-15、2011
- 19) 大坊郁夫：社会的・スキル・トレーニングの方法序説-適応的な対人関係の構築-. 対人社会心理学研究 第3号：1-8、2003
- 20) 畠山千章：看護学生の臨床実習の自己評価に影響を与える心理的要因. 神奈川県立福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録 No.38：120-127、2013

- 21) 神田清子、瀬戸正子：臨床実習評価における学生の自己評価と指導者評価の関係. 群馬大学医療技術短期大学紀要 第2巻：49-57、1981
- 22) 宮崎至恵、中原雅美、村上茂雄、他：臨床実習でつまずく学生の原因追求－質的研究を用いての試み－. リハビリテーション教育研究 第13号：80-82、2008
- 23) 岩田美幸、狩長弘親、三宅優紀、他：作業療法学生の職業的アイデンティティと社会的スキル. 吉備国際大学保健学部紀要 第19号：79-84、2009
- 24) 森谷利香、九津見雅美、池田七衣、他：看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力の関する研究. 千里金蘭大学紀要 第8巻：191-199、2011

Measuring the differences in communication skills between students who aim to occupational therapy, speech therapy and clinical training leaders

Saori Chiba ¹⁾, Akihiro Sato ¹⁾ and Kazuhiko Asada ²⁾

1) Hirosaki University of Health and Welfare, Department of Rehabilitation Sciences, Division of Occupational Therapy, 3-18-1 Sanpinai, Hirosaki 036-8102, Japan

2) Hirosaki University of Health and Welfare, Department of Rehabilitation Sciences, Division of Speech-Language-Hearing Therapy, 3-18-1 Sanpinai, Hirosaki 036-8102, Japan

Abstract

A growing number of students in clinical training are being disqualified by their leaders because of the poor communication skills of these students. The purpose of this study is to clarify the differences in communication skills between students and their clinical training leaders. The ENDCORE communication skills scale (Fujimoto and Daibo, 2007) was used to measure the communication skills of 1st and 2nd year students in the university's Department of Rehabilitation Science (student group) as well as their clinical training leaders (leaders group). The data gathered for the two groups was analyzed using the Mann-Whitney test. The two groups were compared by looking at 1) the total score for each group, 2) each of the six sub-scales, 3) the sub-skills made up of the respective sub-scales. Next, cluster analysis was used to classify the scoring patterns. The relationship between the respective student-leader clusters was then analyzed using the chi-square independence test. As a result only "acceptance of others (tasha-juyou)" was significantly higher in the student group in comparison of the subscales. Although the scoring patterns were classified into three clusters, the relationship between students/leaders and each cluster was not significant, leading to the possibility that target difference in communication of both groups influenced was thought about.

Given the students limited experience with interpersonal relationships, it may be difficult for them to reflect upon or realize their own skills. Therefore, it may be necessary to create opportunities for students to reflect upon their own communication skills as well as opportunities to engage with society.

Key words: Clinical training, Communication Skills, Self-evaluation